

## =本日および今週の礼拝・集会等=

※新型コロナウイルス対策のために会堂での礼拝他すべての行事を中止します。

## =今週の祈りの課題=

- 主イエスの十字架を覚え、黙想し、祈りましょう。
- 感染症の脅威、閉塞感からの解放を願い、祈りましょう。
- 震災から8年後の昨年1月に礼拝を再開した小高伝道所(統計記録なし)を覚えて祈りましょう。(報告欄参照。)

## =今週の聖書日課=

- 4/20 (月)1 ペトロ 4:1 ~ 11
- 4/21 (火) " 4:12 ~ 19
- 4/22 (水) " 5:1 ~ 14
- 4/23 (木)2 ペトロ 1:1 ~ 11
- 4/24 (金) " 1:12 ~ 21
- 4/25 (土) " 3:8 ~ 13
- 4/26 (日)ヨハネ 21:1 ~ 14

## =牧師室より=

- \* 4/21 (火) 午前 農村伝道神学校
- \* 4/23 (木) 午前 "

## =報告=

- \* 農村伝道神学校では、タケノコの収穫を迎えています。個人、ご家族でタケノコ掘りにお越しください。火曜日、木曜日の午

前ならば牧師がご案内します、それ以外の火曜日から木曜日までは担当者が対応いたします。上記以外の曜日については、お尋ねください。

- \* 2011年3月の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故以来、約8年の間中断されていた福島県南相馬市にある小高伝道所の主日礼拝が、2019年1月27日(日)午後3時から再開された。原発事故後は約1年余り強制避難区域に指定され立ち入り禁止になった。付属の幼稚園があるか休園の状態が続いている。町に子どもはいなくなった。そして主日礼拝は全く守れなくなった。/2012年4月以後からは昼間のみ入れるようになった伝道所でのクリスマス礼拝を毎年12月に守ってきた。伝道所の信徒が1名、このクリスマス礼拝のために避難先の福島県いわき市から自宅のある小高に戻り集会の準備を毎回する。感謝である。負担にならないように願っている。昨年の12月が7回目のクリスマスの礼拝になった。/東北教区の取り組みとして18年9月に「小高伝道所の今後を考える協議会」を小高伝道所で開催し放射能汚染の問題を含めた伝道所の直面する課題を共有した。今後は毎月1回の主日礼拝を第4週の午後3時からを基本として守りたいと願っている。特に東北教区で同じ地区に属する相双・宮城南地区の教会の応援が必要である。/全国の教会と伝道所、また関係する施設や学校の皆さんに祈っていただきたい。(保科隆報;教団HPより)

## 【説教要旨】

前々任地の教会、田名部教会は青森県のむつ市にある創立百年余を経た教会でした。むつ市といえは下北半島の観光の要衝ですが、ヤマセ(オホーツクの寒気団)の問題は未だに日々深刻です。ヤマセが一带に吹くと、急激に気温が下がり、お米など農作物に冷害をもたらすのです。例えば、弘前の気温が25度なのに下北半島は17度というほどなのです。ヤマセを恐れる地域の人たちには、辛い歴史があります。1930年(昭和5)年の大冷害ではこどもたちや若い女性たちが売られていきました。ところが、辛い歴史をもつことと同時に、神とか信仰の篤い文化を育んできた地域、人々だということ、郷愁をもって思い出します。そして辛い経験してきたひとたちには、人間の力、人間が誇る希望の愚かさをよく知る人たちが多いのです。

## ▼弟子たちの幻想、その崩壊

「この人なら確かだ」と確信し、イエスに従った弟子たちも、今やそのことを熟知する者となりました。人間としての希望をイエスに投影し、誤解し

ながら旅をし、絶望に行き着いたので。もしも彼らがはじめから十字架の死を知らされていたら、「わたしに従いなさい」という、あの呼びかけなど即座に断っていたことでしょう。そして今や、自分たちの周囲は敵に取り囲まれているのです。彼らは絶望と恐れにのき、心もまた扉を閉ざしているのです。

しかしながらここに来て、弟子たちの恐れは、喜びに変えられました。彼らが恐れていた原因は、敵対する相手によるものだと思えなかったのですが、そこに、イエスが現れ、真ん中に立たれました。そして、「平和があるように」という言葉を発せられ、「手と脇腹(傷跡)を見せた(19節)」ことにより、弟子たちの心に変化が起きたのです。

彼らの敵対する相手への恐れは仮現的なもので、いまや絶望のどん底にある自分と深い関わりをもつ、目を背けたいイエスの手と脇腹が示されたのです、この傷跡を見なさいと差し出されているのです。ここで人間の否定が神の肯定に変えられていくのです。

## ▼メルケル首相の言葉から...

メルケルさんは米国の卒業講演で、ヘルマン・ヘッセの言葉「すべての物事のはじまりには不思議な力が宿っている」の引用から始めるのです。講演の半ば、東ドイツ科学アカデミー物理学者時代を回想し、「...私の住居は、ベルリンの壁のすぐ近くでした。毎日、研究所での仕事が終わって徒歩で帰宅する道の先に、ベルリンの壁がありました。壁の向こうにあるのは西ドイツ、つまり自由でした。毎日、私は壁のすぐそばに行きますが、最後は折り返して、アパートに帰宅しなくてはなりません。日常の終わりに、自由から歩み去らなければならなかったのです。『もう限界だ』と何度感じたかはわかりません。すさまじい閉塞感でした。...」(url:https://agmi.jp/business/articles/321396)

▼むすび

物事のはじまりに不思議な出来事がありました。傷跡を見る、わたしたちの恐れが喜びに変えられる時、わたしたちの中心にイエスが現れ、立たれるでしょう。わたしの否定が、神により肯定される物語のはじまりです。